太宰府人物志

資料室だより ㊿

五卿たちの幕末

文久3年（1863年）、「8月18日の政変」（幕府と薩摩藩・会津藩などが尊皇攘夷派の長州藩・七卿らを京都の政治から追放した政変）の結果、慶応元年（1865年）に三条実美・三条西季知・東久世通禧・四条隆謌・壬生基修の五卿は、太宰府へ移転し天満宮の延寿王院に滞在していました。今回は、第6回でも取り上げた東久世通禧が記した日記を基に、五卿の太宰府での生活を見てみましょう。

日記は、五卿が太宰府に来て3年が経過した慶応3年（1867年）のものが残されています（『維新史料叢書』8所収「東久世伯西航日記」）。前年の幕長戦争（幕府と長州藩との戦争）で幕府が敗退したことも影響してか、五卿たちは、「五卿落ち」という言葉からは想像もつかないほど自由な生活を送っていたようです。

この年の正月には、「都府楼」を訪れたり、「鴛替え」に密かに参加したりしています。また、日々の生活の中で多く目に付くのは、晴れの日には太宰府近隣への遠乗りや、度々「発砲」に出かけていることです。「予三発的中」などとあるように射撃を行っていたようです。雨天には「論語輪講」といって論語の勉強会なども行っており、まさに晴耕雨読のような生活を送っていた様子がうかがえます。このほか5月には「乙金村庄屋高原善七郎宅へ行、終日馳走（中略）愉快愉快」とあり、地域の有力者との交流の様子が伺えます。10月には「早朝微行、宝満嶺へ登り七巌窟巡見、奇岩怪石可枚挙、（中略）実京洛亀山風景、高雄の光景にも不恥」と、宝満山登山を楽しみ、京都の亀山や高雄にも勝るとも劣らない景色であると記しています。さらに11月には「予密に崎陽行を催す」と秘密の長崎旅行にも出かけていました。

しかし、幕末期の経済変動は五卿たちにも大きな影響を与えており、8月には「物価騰貴非常、手当金甚手薄に付、（中略）厩馬五匹省略福岡表へ預置度」と、経済的理由により乗馬用の馬を福岡へ預けることとなったようです。

一方で、この間にも京都からの使者は数多く来訪しており、前年12月の孝明天皇崩御や京都の政治情勢などの情報が次々ともたらされていました。そして、12月14日の日記には「去八日、九日朝廷の模様大変動に付、予等五人上洛被仰出に付、博多表薩州蒸気到着致旨告来、（中略）予等再蒙天恩、実存外の事也、感涙難止満盛院へ行」とあり、王政復古と五卿の京都召還の知らせが到来し、感涙にむせいだと記しています。五卿たちは17日に京都へと出発し、太宰府での五卿たちの幕末は終わりを迎えたのでした。

市史資料室　矢野健太郎